

こんにちは。ブーシュー。ハロー。

リディア・シャーマンと申します。スー・ルックアウトに住んでいます。私たちより北方に、32の小さなコミュニティがあり、2つを除いてすべて小型飛行機でアクセスします。私は先住民・ファースト・ネーションの当事者です。母国語のオジ・クリー語を流暢に話せます。

幼い頃、父は、夏は漁師、冬は罫猟師をしていました。春から夏にかけて、秋の維持部はキャンプで過ごしました。魚、ヘラジカ、ウサギ、アヒル、ガチョウ、各種ベリーのような野生の食べ物を食べていました。魚を踏む野生の生き物の動きに合わせて、キャンプからキャンプへと移動しました。母は、薪ストーブや焚火で料理をしたり、バノック（速成パン）を焼いたり、紅茶やコーヒーを入れたりしました。主にブルーベリーやラズベリーを食べていました。

父は猟師でもあり、私たちの生活は自然な土地から得たもので成り立ちました。夏、春、秋の月々はテントで生活しました。土地や水、自然の恵みを利用して生活していました。自然、木々、湖に囲まれ

ていました。私たちは自然を愛していました。自然に囲まれていると、癒され、健康的でした。

20代前半のことです。短期大学で2年間のビジネス課程を修了しました。父はビジネスを専攻してほしかったが、私は関心を持ってませんでした。人々に関心があったためです。人々を支援し、寄り添いたかったです。

10代後半と20代前半は、それぞれ弟と親しい友人を悲劇的な状況の中で亡くしました。当時は、カウンセリングや支援を受けられませんでした。しかし、自分の中で「避難所」と呼んでいた居場所を見つけました。そこの人たちは、私を受け入れて、聴いてくれました。それがきっかけで、20代前半に、タジン援助分野に就きたいと思うようになりました。大人、子ども、若者、家族、高齢者など、人々に手を差し伸べ、助けたいと思ったのです。

ソーシャルワーク・精神保健福祉分野では、35年以上働いてきました。この5年間は、ファースト・ネーションの団体で、精神保健福祉チームの精神保健福祉相談員としてとして働いています。

1980年代初頭は、（ジョイスが写真を見せた）旧ゾーン病院で精神保健福祉の仕事を始めました。当初は、非先住民の相談員が2人いて、この仕事をしていました。80年代前半の頃、文化や言語に精通したファースト・ネーションの当事者相談員の必要性が認められました。2人から始めて、4～6人のファースト・ネーション相談員まで発展しました。毎月、もっと小さなコミュニティを飛行機で訪問しました。4人乗りや6人乗りの小型飛行機で、寒い北方を訪れました。



北部の小さなコミュニティに到着すると、水道も電気もない1部屋の小さな小屋に泊まることもありました。やがて、このような小さな小屋にも水道や電気が通るようになりました。



Photo taken by Joyce Timpson

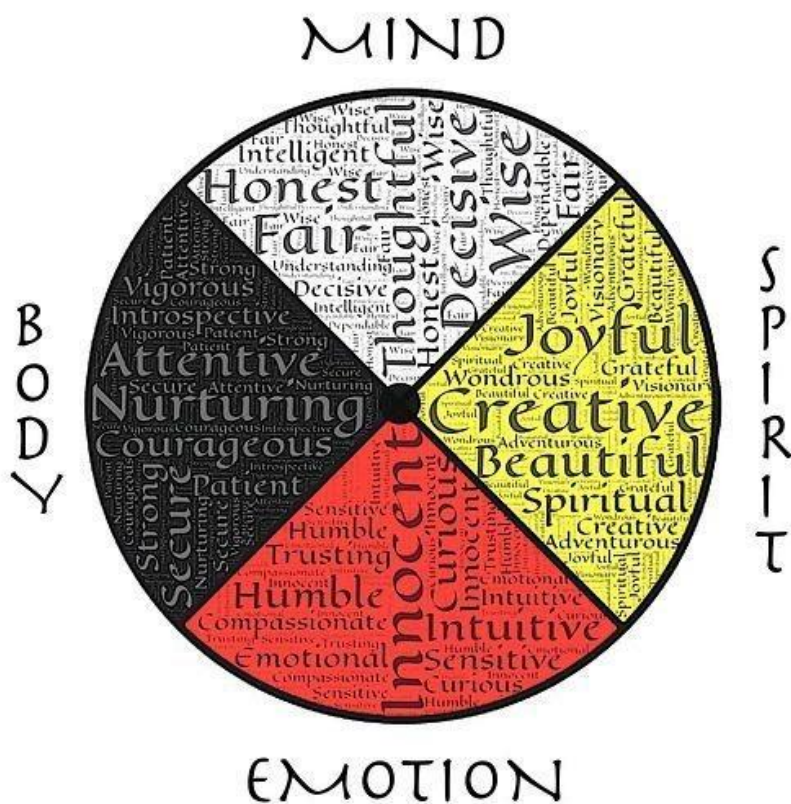
そこに1週間ほど滞在して仕事をしました。精神科医と一緒に旅をし、一緒に仕事をすることもありました。コミュニティに看護師がいる場合もあれば、いない場合もありました。

この分野で働くことになった当初から、精神保健福祉に関する様々な側面や基本的なカウンセリング技法について、精神保健福祉の臨床スタッフや精神科医から研修を受けました。また、3人の長老（女性2人、男性1人）とも協働しました。一緒に働く長老たちは、文化的な側面から支援や学習の機会を与えてくれました。

過去に連携をとっていたある長老が、私たちの仕事は風の用と言いました。彼は次のように説明しました。私たちは風そのものを見ることはできません。しかし、その影響を見聞きすることが出来ます。風は穏やかであることもあれば、破壊的であることもあります。風が導いてくれることもあります。実践の中で、人々と関わる際に、彼らの感情や気持ちを見ることはできません。心の中に何を抱えているのか、私たちには分からないのです。その人の人生には、多くの悲しみや混乱、不安があるかもしれません。彼は、耳を傾け、忍耐強くなりなさいと言いました。相談は彼らの時間であって、あなたの時間ではありません。時には時間がかかることもあります。何が彼らを悩ませているのか、それを見つけるのが私たちの仕事です。彼らは何に、どこに助けを求めているのか。長老は、あなたが支援している人と同じ道を歩みなさいと言いました。その人が歩む道を案内しなさいと。しかし、水がないとか、薪集めを手伝ってほしいとか、そういう物理的なニーズもあるかもしれません。

ということで、初期の頃は、実践の中で個人のあらゆるニーズに目を向けました。「スフィア（球体）」と呼んでいた枠組みを使いました。これは、

人の身体的、情緒的、心理的、スピリチュアルなものを含みます。先住民ソーシャルワーカーは、これを「メディスン・ホイール（治療の輪）」と呼んでいます。私はその名前を聞いたことがなかったのですが、何となく人々へのアプローチ方法が分かっていたいました。

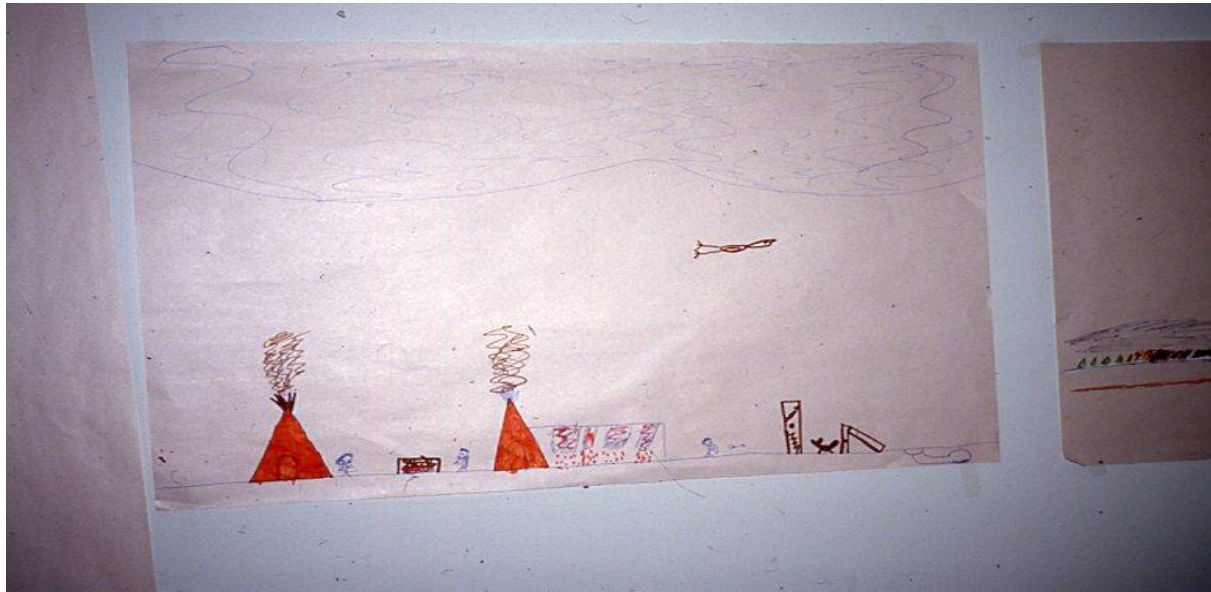


支援現場に入ってから時間が経つにつれて、筆法のコミュニティに出向いて実践しました。事務所、あるいは一部の人が隔離的に感じたため「箱」と呼んでいた場所で働くよりも（人によっては孤立感を感じるかもしれませんが）、人々の相談を自然の中で

実施するメリットを活かしました。というのも、私自身は幼い頃、自然とともに育ったからです。また、自然の中に出かけ、湖畔や川のほとりに座りあながら、忙しそうに自分の家を作るために動き回るビーバーを観察したり、小さな滝のように自然の音に耳を傾けたり、ゆっくりと流れる急流を眺めたりすることは、クライアントにとってもより治療的であったようです。彼らの身体的、情緒的、そしてスピリチュアルな強みの向上につながったのです。気持ちを共有し、癒しのプロセスが起こる度にそう感じました。

寄宿制学校の影響のため、感情を表しにくい人も多いため、アートセラピーや、その人の人生カラーージュを作るなど、非言語的な方法による感情表現も活用しています。文書を書いたり、絵を描いたりすることでコミュニケーション上の手助けを必要とする人々を支援し、コミュニケーションを形成する方法の一つでした。相談をゆっくり進められるように、人々の支えになりました。アートセラピーがためになる人々がいました。アートセラピストの指導の下、一部の絵が何を意味するのかを学びました。例えば、暗い絵の場合は、その人が落ち込んでいることを意味するかもしれません。子どもが描いたこ

の絵は、ティピーの上に飛行機が飛んでおり、文化の違いを示しています。



他にも、コラージュも活用します。古雑誌や古新聞から絵や文字を切り取って、紙に貼るものです。手を動かす活動で、本人にとっては治療的であり、話すよりも負担の少ない表現方法に集中できました。アートセラピーとコラージュは、どちらも治療的なものでした。人々が自分の感情や考えを処理するために役立しました。

これは、コラージュの研修セッションで、あるワーカーが自分自身のライフストーリーを作っている例です。私たちの信念の一つは、他人を癒そうとす



る前に、自分自身の癒しに参加しなければならない  
ということです。

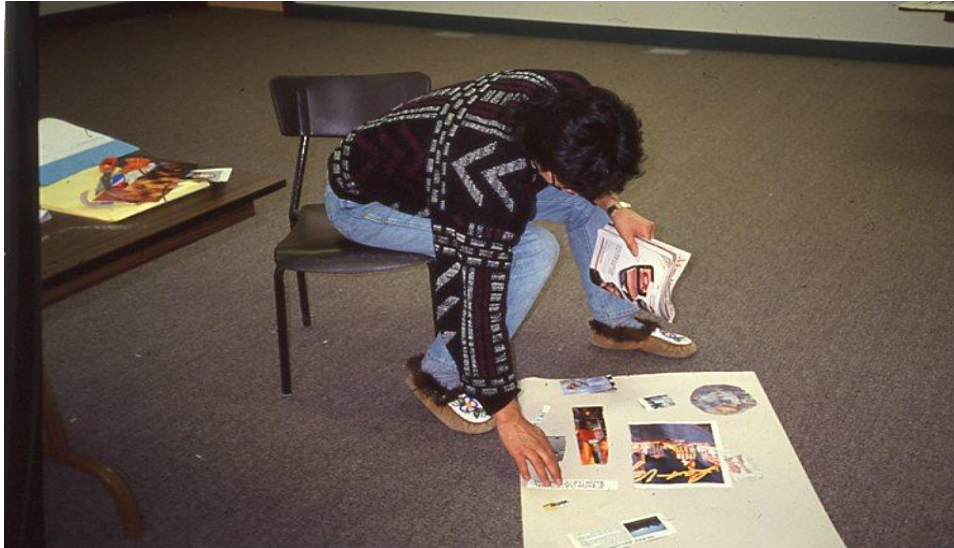


Photo taken by Joyce Timpson

ジョイスは、私たち先住民に起こった歴史的なこ  
と、そして世代間トラウマについて話してくれまし  
た。次は、これらが私の家族や私の民族にどのよう  
な影響を与えたか、その例をいくつか紹介します。

1940年代から1950年代にかけて、北方のコミュ  
ニティを結核が襲いました。多くの人々が結核にか  
かり、家からオンタリオ州やカナダの各地にある結  
核療養所に連れて行かれました。子どもも、若者  
も、大人もそうでした。家族は長い間、離ればなれ  
になりました。私の父も結核でした。帰れるまで、  
合計5年間も家を出て療養所にいました。その間、

私は父親がいない状態でした。私の一番上のおばちゃんが一番下のおばちゃんも、50年代に療養所にいました。一番上のおばちゃんは帰らない人になりましたが、どこに埋葬されているのか分かりませんでした。その墓は、90年代後半に、ずっと年上の子どもたちが見つけました。一番下のおばちゃんも、1970年代半ばに故郷を短期訪問するまでは、戻ってることがなかったです。

寄宿制学校は、1800年代の半ばから1990年代の半ばまで運営されました。1970年代以前には、多くの家族が強制的に引き離されました。わずか5歳の子どもたちが、時には何年にもわたって家族から分離されました。子どもたちは身体的、情緒的、性的虐待を受けました。現在でも多くの家族が寄宿制学校の影響を受けており、「世代間トラウマ」を引き起こしています。私たちは、相談活動の中で、人々の親世代がどのような経験をしてきたかを考慮しなければなりません。

私自身ですが、寄宿制学校には行っていません。しかし、2人の妹と1人の弟は行きました。兄弟が寄宿制学校に行った時は、私や家族にとって寂しい時期でした。

60年代に、乳幼児から16歳までの多くの先住民の子どもたちが、児童福祉当局によって家族から引き離された。これは取り上げられたように感じられたので、「60年代の取り上げ」と呼ばれました。精神保健福祉相談と同じように、非先住民ワーカーは、代替策を探るために先住民とどのように協働すれば良いか理解していませんでした。これらの子どもたちの行方は、カナダ、アメリカ、そして海を越えても、たいてい非先住民の家庭における里親ケアや養子縁組でした。これらの子どもたちの多くは、両親が寄宿制学校に行っていたため、その影響に苦しんでいました。彼らの多くは今、自分たちの文化の喪失に苦しみ、白人世界の中で迷子になっていると感じています。これは、寄宿制学校の世代間影響のもう一つの例です。

これらの例はすべて、家族の結束を乱し、言語・文化・土地の喪失をもたらしました。その結果、孤独や別離、不安、うつ病などを引き起こし、数え上げれば切りがありません。

今日、先住民はトラウマや喪失感に苦しんでいます。その多くは、寄宿制学校の影響と文化の剥奪に

起因しています。アルコールと薬物で対処しようとしている人もいます。

同時に、私たち先住民はレジリエントな人々です。かつては、喪失を認めながらも、生き延びるためにすべき物理的なことがたくさんあったため、必死に生き続けてきました。現在、そのような昔のやり方を取り戻そうとしています。子どもたちに土地に根差した活動、文化や言葉を教えています。また、先住民当事者の医療専門職やソーシャルワーカーも養成しています。ますます多くの若者が大学や短期大学に進学しています。自分たちのためのサービスを自分たちで管理・運営するようになりました。ファースト・ネーションは、生活の質を向上させるために、政府と協力しています。私たちは癒しの旅を続けているのです。

ありがとう。ミーグウィッチ（オジ・クリー語）。サンキュー。

リディア シャーマン